



茶
185
6

昔話 稻妻表紙卷之五上冊

五狐 鴉の禍福

江戸 山東京傳編

東京

當時あむ右衛門又平考一同ふ金の出所いふと。いぶるしむひけは一所ふ
一人の男汗もあたらふ息もほれあふど。飛がごとく小をせ来り。案内も
あむ右衛門が手小持する財布とるはけ。その我失ふたる金
い方へくとるしむひり。財布小手紙の所と。あむ右衛門よりそむ
ハ長谷部雲六あむとくとのび男仰天しむりくそむ佐良三
八郎あむかしら若殿桂之助もあむけむ。まもりく警馬財布も
とるて逃いごとと。あむ右衛門猿臂と伸る。あむとるびほりてひこ

古今圖書集成

腹はら不ふぎとつたて。と苦くるしむ息いきをつとていひけら。あまぢきましや
 勿な体たぢや。今いまやうく天てんの賞しょう罰ばつのたぐひあるまをまて。積じ悪あくの報ほうの
 親おや面おもてふめがとまると瓜うり曉あけしぬ某たれ。懺ざん悔げ物語ものがたりと一回いちどおん固かたま
 か。そのま某たれ在京けいのうち。五ご條じょう坂さかの曲まが中ちゆうふ通とほひて過あや分の金銀きんぎんを
 取とり。身み分ぶんなちぬれあり。偶たまたま悪あく念ねんおろそと。百ひゃく蟹かにの巻物まきものと盗ぬす
 取とり。館たねを出で奔はしして。北きた山やまをよれ杉すぎ坂さかふけり。けりふ折ましも風かぜ雨あめ
 つりありけり。あし木き蔭かげふ暗くら間まを待まち居ゐたふ。それわら婦人かみど来き
 ぬしむ。懐なつか中ちゆうおのげふえけり。又また悪あく念ねんおろそ。婦人かみどを地ち上じやうふ
 踏ふ倒たおして。二十にじゅう兩りやうの金かねとらびひ仕ま合あしと攻こうびて。その所ところと逃にげ去さる。ち
 の巻物まきものを金かね五十ごじゅう兩りやうふ賣うけり。二ふた所ところ不ふ住ぢゆうふ迷まよあり。同どうふの金かねと
 残のこり。つひに尽つし。つひに雲くもを落おして。つる所ところとなりぬ。某たれの金かねと奪うばて

死しふいさうまめんこ。三八さんぱち郎らうのへ金かね以もつて死しを救すくむ。ひつるは。今いまは
 善ぜん悪あくのたぐひ誠まこと不ふ壤じやう霄せうとただの係けいが。し。豈あに賞しょう罰ばつの報ほうを。ま
 初はつ某たれらう。当とう国こくふいさうして。草くさ津つの駅えきふ住家まけをぬ。幸さいひ石いし山やま寺てら
 の觀くわん音おん用じやう帳ちやうあり。てふ。けり。けり。門かど前まへふ出で鼓つづみを。お。世よ舞まひく。の
 誑うそどうなひて物ものを。え。けり。ふ。前まへの日ひのひうけ。幼せうねん年ねんの時ときワ。た。た。係けい。
 八はち重じゆう垣げんと。ふ。妹いもふ。あ。ひ。住家まけふ。も。り。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。ひ。何なにこれと過あやま。り。ふ
 づも。を。誑うそて。けり。ふ。妹いも某たれが。か。浪なみ人ひとしたる。い。それと。い。ひ。け。り。又また悪あく念ねん
 ち。ら。う。の。つ。つ。と。い。ひ。け。り。我われ前まへの年ねん在京けいの刺さ偶たまたま五ご條じょう坂さかふ通とほひ過あや
 分の金銀きんぎんと。つ。や。そのお。ひ。め。を。は。く。の。ん。為ため。若わ殿てんより。あ。つ。ら。な。る
 絵え巻物まきものと。質あつ入いれし。は。る。が。つ。ひ。ふ。その。あ。つ。つ。れ。て。い。と。自また。な。る。も。の。浪なみ
 の。牙こと。な。り。ぬ。格かく別べつの科かも。あ。り。ぬ。今いまも。あ。の。巻物まきものを。う。け。り。し。

てさし上げぬ。飯茶の切らぬ必定あらねども。本金小利金をくらへて。ぬれ
 こも百両たりその金ちねば。けりくさのひびやく。今先非を悔ると
 ひどもかひわしとのひて。そと泣くそとせせけとハ妹これと実や。し
 まるバ妻が牙を賣て金以その人。その巻物と受けり。て飯茶
 を願ふへとつあを。其心小計なりと攻び。う多くつらと情なきも。
 妹を当所の伏柴の里小めて由き。百兩小牙を賣て。今日もその
 牙の代をうけらる。天へものありそらして。つる路の傍小。一羽の雁首
 をあけて。ユ洛居らる。飛けのひらなく。又あとも。抜足して拾取て
 又傷小。笠前の疵。鶴のあともなり。初へら。ぢ小出る雁金の。行倒ると
 推量し。何あすれ。福のつらと。時晩の寝。泄の香とし。ひきく飢たる
 瘦腹と肥えんののと公のうち小遊び。そや榮耀心いぞ。提てゆくも

つらぐ。しと金財布の。紙のあも。てを。雁の。翅。子。ひ。つけ。肩の。夫。あり。と
 げ。懐。手。て。飯。し。し。が。何。と。と。志。けん。の。鷹。途。中。少。て。獲。生。う。ま。つ。け。な
 財布も小。虚。空。を。存。して。飛。去。け。の。あ。ひ。ど。翼。た。た。牙。を。悲。し。と。て。
 の。と。と。あ。ひ。て。は。処。す。て。追。来。り。し。が。ユ。洛。べ。兒。所。も。あ。る。に。此。小。あ。ら。し。て
 君と始めなり。かのく。方小。出。会。し。某。が。旧。悪。の。あ。ら。う。ハ。正。是。兄。の。為。小
 牙を賣。不。との。実。の。妹。の。牙。の。代。を。ひ。ら。り。し。某。が。非。道。を。小。く。も。
 天罰を多へ。あ。小。疑。ぢ。今。小。い。う。て。ア。リ。と。こ。ひ。わ。と。と。て。財。布
 を。と。ら。と。あ。げ。此。百。兩。の。金。ハ。先。年。奪。し。二。十。兩。小。利。と。ら。へ。て。又。平。小。の。小
 此。と。の。ひ。ど。合。力。う。け。し。三。八。郎。の。へ。は。終。返。し。ま。ひ。て。傳。息。女。楓。の。あ
 る。と。の。が。わ。ひ。返。し。ま。ひ。と。う。さ。も。の。が。バ。我。牙。の。罪。の。一。分。を。減。し。い。ま。ら
 来世とたをめる。便。も。相。あ。ら。べ。し。い。を。れ。を。同。ね。バ。そ。と。小。あ。り。ひ

しぐ。は度石山寺の門前。諸人小又とる蛇娘ハ楓どの小疑りし。
閉をけては清兩人といひて。掌と合して拜。涙を滝のごとくわび
け。又平の財布をさしてあむ右衛門の前。おれ雲六慚邪讖
罪。て実心ふひか。おし。不便も存。わね。望のこく
此金。息女をあげ。ひ。此。おむ右衛門頭を右左。あり
う。じ。い。八重垣とやん。さ。實の。者。川竹の。や
と。ふ。長。辛。苦。と。う。け。志。う。ん。の。び。め。さ。り。や。娘
楓。ハ。う。く。覚。悟。の。う。へ。て。親。の。為。ふ。づ。か。し。め。と。う。る。り。お。せん
と。ど。わ。り。以。金。を。出。して。八重垣と。こ。と。り。し。は。く。さ。さ。し。といひて。
う。け。が。い。さ。し。ハ。雲。六。苦。げ。息。女。を。つ。き。お。その。金。を。は。息。女。の。身。に
お。か。ひ。あ。ら。う。ハ。つ。つ。と。妹。が。實。公。の。か。ひ。も。あ。ら。う。し。珠。更。その。金

おんオの膝のあそふ落たるよし。畢竟天より忠臣孝子以賞ト
あひて与へ。あふ疑り。若海川やもあつとや。妹が志ハ水の泡と
や。と。失。し。ひと。ふ。ん。同。け。お。わ。ら。う。し。若。さ。も。あ。ら。う。某。死。し。も。
ら。う。く。眼。を。さ。さ。り。や。ま。ま。と。て。涙。を。な。ま。して。わ。ひ。け。桂。之。助。死。
終。と。同。悪。も。は。く。善。も。つ。に。彼。が。わ。ひ。未。期。の。望。や。お。む。
と。け。は。く。さ。さ。し。と。お。れ。あ。せ。お。か。む。右。衛。門。や。う。く。ら。れ。と。う。け。ひ
け。雲。六。い。う。と。げ。打。笑。今。ハ。此。再。小。の。を。さ。ら。し。死。出。の。旅。路。は
い。そ。ぶ。や。相。公。の。御。前。を。け。ら。罪。ハ。お。ん。免。し。わ。れ。し。と。て。腹。十。文
字。小。の。さ。や。ぶ。て。咽。吭。と。お。れ。斬。て。う。ら。づ。お。伏。て。死。した。う。け。時。ふ
あ。む。右。衛。門。の。鳥。と。さ。ら。と。あ。け。て。う。く。此。鳥。鷹。小。似。た。と。い。へ。と。も
う。く。く。ん。ハ。漢。名。蒼。鷲。と。い。ふ。鳥。なり。よ。く。高。飛。鷹。小。似。て。蒼。白。之

目相見て孕こ吐はて子こ生うまひつり。夏か子こ益まぐ奇き疾し方か子こ蒼そう鷓じの肉にく小
 人ひと血ちを和なりて。瘰れいを治ちと所ところ方かたありと。ある名な医い小こ因いんたる夏かあり吃く寒かん
 小こも又また驗けんあるすれ小こあぶど忍しのひうけどかる奇き鳥ち成なり得えたるも。又一また奇き
 事こと奇きなり。さうさうりちひ五ごのどやといふぞ。又また平へいおそあ鳥とりの肉にくとされ
 さらそ火ひああぶり。雲うん六ろくが鮮せん血けつとそだて食たべし。小こ頃ころ小こ咽のどとさうり。
 生うまひとけれたる吃く寒かん。忽たち常じょうの人のものつとく小こげり。これもまた天てんの
 手てへかゝりつとくさうりぬも。いとおれり有ありぬ。小こ枝えだ於お竜りゆう号ごう六ろく不思議ふしぎ
 といひて攻せびぬ誠まこと小こ奇き異いの夏かなりけり。かる折おしも外との方かた小こ人ひと
 の足あし音ねひびきけぬ。又また平へい小こ枝えだ於お竜りゆう小こ目め六ろくと桂けい之の助すけと一いつ回まい小こ
 かくし。雲うん六ろく屍しと蒲ふ團だん小こる。て床とこの下した小こ押お入い入いとねがふひぬ
 もわく。えせ物もの芝しば居いの主ぬし。楓かへと伴ともひるぞくといひはく。裏うら小こつと

あし右みぎ房ぼう門もん小こひくひていひける。おん家いえ今日けふ日ひもは病びょうとよきぞ。あひしは
 僕わらわがすつけて告つげし。急いそ楓かへをわのせりさんたぬ。旅りよ宿しゆくとたぬ。小こ桑そうと
 しの。楓かへの父ちち小こもさうり。あつとたるはあ姿すがた母ははも人も恙あやり。おのこもさ。あ
 涙なみだ小こ詞ことばなり。勿なむ右みぎ房ぼう門もんの折おり。幸まことと攻せび。たぐひ何なにととめ。さ
 あひて後のち芝しば居い主ぬし小こひくひ。急いそあつとさうり。ひうけど金かねのひはら。光ひかり金かね
 百ひゃく兩りょうと以もつて娘むすめをりどしたぬ。さうりといふ。芝しば居い主ぬしとさうり。さうり。ひ
 楓かへの京きやう大だい坂ばんの勿な論ろん。伊い勢せ尾お張ちやうのあつと。さうり。あつと。さうり。ひ
 徳とくは死しをねば。即すなはち坐まふ百ひゃく兩りょう度どし。あつと。さうり。あつと。さうり。ひ
 このふぞ。南なん无む右みぎ房ぼう門もんす。あつと。攻せび。あつと。金かねとさうり。さうり。ひ
 芝しば居い主ぬし教がうをあつと。あつと。さうり。あつと。さうり。ひ。あつと。さうり。ひ。あつと。さうり。ひ。
 金かねのうけ取とり。いぬのさうり。と證あかし文ぶん小こあつと。さうり。印おし信しんとさうり。さうり。

名古屋巻之五

五

晩鐘はけけりて。勢田のあらし夕日のかげぞめりけり

(六) 名 畫 の 奇 特

初も其時あむ右衛門。至君桂之助ふねうひて娘楓おゆゑをさせ。又平夫婦阿童等ふも引合せ。今日のくらしは物語とやうにさせければ。楓お同て因果輪轉の理善悪つひふ報あるまを曉して嘆息しけり。かくて又平夫婦食事と調じてあむ右衛門父子ふあへ一間のうらみみちびいてやとぬせけり。あむ右衛門父子はたえそひさしけり。出合なりぬ。さぬぐの物語ふるほど時とらけ。やうく睡ふつとけり。やうして楓が声とてあむ右衛門とあむ右衛門敷馬ゆきと醒て又楓が腹ふ巻はるる小蛇懐くを飛出ると見えし。忽丈一丈

わうこの大蛇と変。楓が身とくへもあむ右衛門あむ右衛門のうらみみちびいてやとぬせけり。あむ右衛門敷馬ゆきと醒て又楓が腹ふ巻はるる小蛇懐くを飛出ると見えし。忽丈一丈



楓孝道
あつさふり 夢中
名画乃奇特と得て
妖蛇乃難義と
まゝ



藤波
成仏
得脱と

あむ高門が夢中の夏とて。灯火をわけての巻物を熟覧し。掌を打ていひけり。奇なる妙なり。巨勢の金岡。清和陽成光孝。宇多醍醐の五朝。子仕へて。官大納言。小至る。曾て御府。子藏。あふ金岡が画けり馬。毎夜萩の戸のやとるとみ出て。萩の花をくひしと。古今著聞集。小ええたり。まゝ。仁和寺の御室。小金岡が画馬あり。近田のやとるとみ出て。稲の苗をくひしと。まゝ。河内の国。金田村。牛頭天王の社頭。の金岡が筆の絵馬。ぬけ出しと。りたぐひの説なり。めて。同傳。ふるといふ。とも。目前の奇特を。見る不思議。さ。抑此百蟹の圖。ハ金岡殊。小精神を。こめ。螃蟹の絵。小妙。以得。り。唐代の名画。韓滉といふ者。玄宗皇帝の勅ありて。画たる。百蟹の圖。小あり。ひて。画たる。とい。同。は。る。が。ス。る。ハ。今。が。区。け。め。り。神彩飛動。誠。小。生。る。が。如。し。奇。特。あ。る。

も。う。べ。り。り。某。と。と。ス。て。画。道。の。奥。儀。と。さ。ら。の。あ。り。と。い。ひ。は。り。歡。ひ。て。巻。物。と。し。い。ひ。と。再。又。い。ひ。け。り。と。小。は。は。り。て。み。ひ。び。き。る。物語あり。昔山城国相良郡久世郡。綺田村。小一個の美女あり。曾て仏道と信ぞ。一時里人あり。この蟹と捉へ。煮て。く。り。ん。と。の。女。是。を。ス。と。あ。い。ひ。し。と。美。食。小。か。つ。て。蟹。と。尽。く。池。小。え。た。る。又。その。父。一。時。野。小。出。て。蛇。の。墓。と。吞。と。ス。て。あ。り。れ。と。若。墓。と。ん。ち。や。べ。我。娘。と。汝。小。あ。と。ん。と。い。ふ。蛇。ら。ね。と。入。た。る。さ。ら。ふ。て。墓。と。吐。て。去。り。む。その。夜。衣。冠。の。若。人。来。り。て。約。の。ご。と。く。女。と。と。り。と。い。ひ。て。一。室。小。つ。と。忽。大。蛇。と。妻。と。て。女。の。身。と。ま。ま。と。小。時。小。前。の。日。た。と。ナ。ら。れ。と。あ。む。の。蟹。こ。小。集。り。大。蛇。の。遍。身。と。螯。殺。し。て。女。と。と。り。ひ。大。蟹。ハ。去。小。解。里。ハ。と。と。小。死。と。り。て。その。所。小。蟹。や。び。蛇。の。か。と。う。ぐ。め。寺。と。建。て。

晋門山蟹滿寺と号を或まゝ紙幡寺ともいふは元享叙書卷八
 小つへえたり。息女の事うけい夏小似くも。ふふの陰徳陽報の
 理と示しうけの名画の奇特ありて孝女とて共ふ是仏の慈
 悲衆生濟度の方便之あれ壁におしたる我拙筆の絵を又之に地
 水火風の四つの緒の。うけてえうやれ琵琶法師も忠孝全き竹杖
 みて煩惱の犬とお畜生道とすぬわけて天堂小生うらめちや。子
 息文弥どの姿絵とも又まへし。緑青の髪とぞ胡粉の肌无常
 の風子塗笠も骨の残る手弱女が肩小ぬけ一枝の紫雲たきびく
 藤の花と妹藤波が成仏の女なり。積悪の角と折鬼なりと心
 をひらいて墨の衣小鈕ちきぬは是乃長谷部雲六が邪念を滅せ
 し突りてや。喜怒哀楽小いりて。もろくののちとす。善と

やうして悪とあり。正とあり邪とあり。恩とあり仇とあり。三世因果の報
 こそへは互の恨もつらうの。矢猛心とすげて唯彼等が菩提とていふ
 小志に。某にやどの夢小。友浪姿とあり。敵三八郎どの親子のいじ
 さ忠孝と感どねば今ハ恨も尽さず。安養浄土小生とれとて
 て。うらと光明をえりて去とす。ねば成仏得脱とていひは。こ
 の小折しも桂之助小枝於竜と共小。ねがをきぬて一回と立出
 我く三人もあらず。夢をえりてこのひて一回小。あびけ。時小。楓
 父の前小手とつと。妻こと姿とて。友浪どの文弥等の菩提と
 とひくく。ハ。剃髪とて。尼とて。玉のどしとて。あむ右衛門のう。く。
 のか。汝剃髪无用なり。我今うらと剃髪して。佐渡嶋坊と名告。
 我異名と汝小。あづり。若殿を立小出。まあ。世。後ハ專修の念



梅津嘉門



梅津嘉門
河内國金剛
山小世と避て
清負と
生涯の
まより
か

か
ま
の
ま
よ
り

各古屋巻之五

十三

うけつたは様もわく飯つるが。又今日も来りてそちふあひたき望
 りれども仕官うさる心あければ。どやく人ふあひさぬふ志くならざらざら
 かねてふひて他行とつりつておんさとさるふ。あうら飯宅を待んとて
 かのぞと寒気ふ苦しむたけ者。ば方の心も察せむと長居さるうらひ
 人。ゆくとちとあつとだれふあつと。かの若者ふ除じて追飯とふまじ
 とのひて若者とちうづけ。俄小詞とつてのひける。汝されど奴僕とも
 おつとつひつら詞ふよそ。中しつるまあつと。かの雪中の侍と汝が辨
 舌とつておひつせ。いふつらも嘉門へ他出せしつひて是非とも
 つせとつひつらねい若者うけあつと。某侍を公の手柄をいふおん
 手ふあつら馬麻者とおひつてとるせやさんとつひて。外のかふ立いで
 ちと旅人おんあつとを待たさるも。あはれ嘉門の飯宅のわと何の時と

ちとつらねい若日もくれさる難儀のうらの難義わつらんとくあつとつら
 つとつひつら手とつらとつひたつらんとせしや。親とるそ仰天。貴君の
 由理之助勝基公あつらとつら。いふ姿の何あつととち驚つ。茶礼以
 行ひ。官領職のおんあつとつて。一人の従者をも召具せしめど。あつと
 御容体。いふかきと相のつら。勝基の人の桂之助国知とつらつれ
 ども。一言の答あつと。唯拳と握り歯とつとあつと。寒気ふなつらつら
 子あつと。桂之助とつらつら。某おん館議政公の御気色を損。濱名入
 道殿の御内意ふつらつて。父の勸気とつらつら。身あつらつら。おん詞とつら
 つらつら。理あつら。あつら大雪とつらつら。自は家ふつらつら。と察
 らふふ。嘉門を軍師ふ召抱あつら。結構に存ぶらつら。某今日も山
 中ふつら。心を尽して。嘉門ふ近づさふも。別意ふあつと。曾ておん館

嘉門が編たる武道徒然草とのみ昏を。御懇望ありこのとも。かど
 ふく極して他見とあるさぶど若衆命を以て召よる時々の昏
 を焼て。おとびくさんと必定ありとて。それまでそのおん沙汰もあ
 ざりさ。某偶ひるをさひひじ。またと嘉門お誠心とせ。かの
 昏を得ておん館ふたてまつり。そとに微功とわして。父の勳を赦
 免の御内意を願ふん為わりとわして。勝基尻目おかけ。その
 外放佚无慙あして。おん館の御不與とかり。父の勳をどうけ
 たる者。おのれに詞や。とのさるふあぞ。桂之助けお理とそのおの
 料と後海。いづつ嘉門親子。勝基とのちあけのひて味方お
 つけ。せめての功おとすべし。心のうちおとひく。おとれねて内お入
 老母の前おひき。おとすべし。老母もる。その馬麻者。おのれに。おとすべし。お理

いふておとすべし。おのれに。おとすべし。お理
 家不足をさる。嘉門と師とたの。兵法の道とらと。おとすべし。お理
 うおるふ。おとすべし。お理
 公より。おとすべし。お理
 之助。おとすべし。お理
 おふ。おとすべし。お理
 さ。おとすべし。お理
 おん。おとすべし。お理
 つけ。おとすべし。お理
 おも。おとすべし。お理
 鏢。おとすべし。お理

黄金作の丸鞘の太刀をもちて文武曲の二星と画たる軍扇と把て
 立出たる為体志気堂々威風凜凜として誠小一個の英雄と見えたり
 桂之助仰天し何人ぞと顧み是乃別人乎あざむ梅津嘉門景春
 なり。其嶮々敷打拵をといふうけり。嘉門門外に出。勝基をいざ
 なひのわて上坐ふと急桂之助の手ととりてその次おぼしめ老母あり
 こそたるゆふより平伏して恭礼とおこりひ。まづ勝基おひひてひけり
 其がごとく不肖の身と。いざより御懇望あるまゝ真加ふあやむ仕合之
 頃日某が他行のあとし。兩度までお駕を枉らばひ。母の物語小
 うけたるゆりねども。勝某公といひもよるをえん。其のさう虚名と
 去りてこれまで諸国の諸侯より。召抱んと使者の来往。まげといふも
 その大将の心づかれも皆高禄をえり。其のさう虚名といふも。

軍師といふ礼義とまゝ。只權威とめて招くも返答もいざ
 かく。当代諸侯おし。主君とたのむ人。いとせめて多く
 かくして居る。小敬馬入たる公のめん。官領職のあはれ。おしを
 以て唯一人の従者とも具せり。雪中の寒気とあはれ。雨
 ちも權威のつらき。某一人とておん招き。おんを
 へたむ。先勿休む。いと。いづれおん招き。おんを
 麾下小属する。そのまじ。小兵具を帯して。おん目。おんを。相
 のづけ。勝基おまむ。我蜀の劉備。おんを。三度。此
 廬とつり。軍師を。おんを。礼。おんを。苦辛。おんを。
 先んて早速の許容。おんを。おんを。老母。おんを。
 けり。始より。勝基公と察し。おんを。おんを。おんを。

憂慮卒忽の太将。又寛仁大度の大将。をばるる御心底どうぶひ
 一ふのゆゑに全よりさせざる心なり。我子あざむ一方の大將。不足ま
 嘉門と一生深山の埋木谷の泉守と朽果させん。母がまを御
 存云のさせん存つる度。心あもぬ。不礼のこと。誠中せし。も
 堪忍のをばせし。心のうちあはれ。わづり。勿体なく。只感涙とお
 かくして。居ゆひねとのひて。老の涙。そまるとなる。老母又桂之助。おひ
 され。わど途中。あておん目。おひし。時よ。唯人あざむ。とさひ。お
 わど勝基公。おん物語り。とのめ。わてうけ。たむり。果して
 君あて。おひし。わど。一度も。見え。目ええ。のさ。わ。ば。妾。と。おん。え。知。あ
 はしく。妻も。又。おん。親。と。え。ま。ぬ。れ。ども。今。何。と。つ。つ。み。な。に。君。の
 元来。妾。腹。あて。その。後。実。母。ハ。妻。が。娘。嘉。門。の。為。わ。好。あ。て。君。ハ。産

ありて。と。と。よ。み。身。ま。う。さ。ゆ。ひ。ぬ。奥。方。ハ。賢。女。あ。て。お。ひ。世。も。少。も。嘆。の。つ。ら
 なる。奥。方。の。御。正。腹。と。御。披。露。あ。て。平。人。の。身。あ。て。や。ま。ば。君。の。妻。が。為。女
 孫。あ。て。と。も。腹。ハ。と。ま。り。ち。つ。と。の。あ。れ。ば。妻。が。為。女。も。正。一。く。主。君。り。と
 かつ。と。め。あ。も。奴。僕。と。よ。び。打。擲。せ。し。大。罪。あ。れ。ども。それ。あ。い。さ。さ。く。縁。故
 の。見。は。色。を。御。境。を。ま。り。し。と。は。出。と。桂。之。助。ハ。始。て。実。母。の。母。の。ま。又
 を。知。り。て。お。驚。馬。頓。お。包。と。ひ。く。さ。え。は。短。冊。お。ひ。の。短。冊。あ。る。と。と。あ。げ。つ。ら。ば
 咲。白。入。柳。津。の。川。乃。花。さ。う。さ。う。の。後。の。ゆ。け。も。ら。ぬ。お。と
 この。歌。を。ま。さ。せ。と。桂。之。助。眉。と。あ。り。あ。て。は。手。跡。ハ。え。お。え。あり。この。老
 母。小。膝。と。と。ら。ぬ。その。為。家。卿。の。詠。歌。は。て。夫。木。集。お。入。たる。歌。わ。ら。が
 その。つ。く。祖。父。君。佐。木。盛。貞。公。御。在。京。の。折。か。ら。妻。が。夫。梅。津。兵。衛
 北。野。の。社。人。あ。て。あ。り。し。時。御。連。歌。の。つ。と。お。ひ。え。筆。と。と。め。て。あ。る。り

夏ことどりのいののぢりけの嘉門嘉門又先年濱名招さふ忘せして山石坂
 猪の之八才教人をあらしめしたる夏をあらしめしたる夏をあらしめしたる夏をあらしめしたる
 權兵李の夏を論じ嘉門嘉門当山小住常ふ千早の城路をえり楠氏の
 奥妙を感る夏を論じ嘉門嘉門嘉門の山中小唯ひとて往来して若濱名方の者
 官領職のおん承りて山中小唯ひとて往来して若濱名方の者
 ども因知し多勢と必ししてあらしめしたる夏をあらしめしたる夏をあらしめしたる
 ちうづづととり軍慮のわとうけたらりて度ゆと詰問ハ勝基せえ
 尔と打笑さる時の備こふありのひり懐を探り蹄笛をここし出て
 吹立あらしめ忽鐘腹卷小臂手髑楯をらしびくあらしめて葉笠をらし
 看たる荒武者ぞもその木蔭かつの岩のげらりあらしめして数十人
 馳集り杖とくませらる馬を引出して御飯館こらいぬ嘉門ぢり

あらしめて感嘆し。それのあらしめしたる虚無の謀計は兵の
 必しと其理さらるやらりと称美の折しも以前の手負熊いらるひ
 ては短く走り来るを荒武者ぞもあらしめしたる手槍をらしめして已ふつて殺
 さんとしけるを勝基えあらしめしたる声あらしめしたる夫六韜
 を考る小文王太公望を得らる時止して非熊といつて我今已ふ当世
 の呂尚を得ていうまご熊を欲せんマ无益の殺生好むばらむといふ
 放ちぬとあらしめしたる荒武者ぞも呀ここたつて放ちけり勝基祥之
 助小ひらひ和殿の今まあらしめしたる世とまのひ飯国の時節をまらしめしたる老母
 いたらしめしたる家あらしめしたる乗物をあらしめしたる嘉門
 今まあらしめしたる幸雪もあらしめしたる此のまあらしめしたる馬ひらひといふ
 て乗あらしめしたる吉加門の馬の左り小まあらしめしたる大勢力の荒武者ぞも列をたらし

して前後をかみ。ゆりの雪は踏分て。林麻を介てのそだやく。
老母の嘉門のゆに門出とるかうて。まろふあぶとつとも。林
之助のまるとあぶしげある。次女をえまぶ。物あまのさび悲しくかきこ。
まぐへ詞もある。はるが。桂之助ふむひひ。さうさうふ君はあひせ。あま
めん方あり。ゆきまるとそ。奥深くまるとさうさう。一間のうちふつさやひり。
られ何人ふあひまるとまると。のちくの巻を讀得てまるとん

○雍州府志曰梅津清景の塔梅津邑ふあ。清景ハ藤原惟隆
十八世の孫也代々院の北面を。禪法ふ飯。剃髪して日心と
号と云。案ふ一説是球ゆれ。是るをまると。此考ハ卷之
第四回の下ふ記とせ。誤てゆし。ゆ。此ふ記せ。彼處
てゆし。まるとん。

